平成 31 年度　全国学力・学習状況調査　箱根町立小・中学校の調査結果について

平成 31 年 4 月 18 日に実施された全国学力・学習状況調査の箱根町の結果をまとめました。

1　調査の目的（文部科学省より）

◇義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る

◇学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる

◇そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する

2　調査の概要

箱根町では、4 校、99 人の児童・生徒が参加した。

内　　訳：町立小学校 3 校全 6 年生 49 人、町立中学校 1 校全 3 年生 50 人

3　調査内容

（1）教科に関する調査

（国語、算数・数学、英語）

① 身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等

② 知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等に関わる内容

※平成 30 年度までは、知識を問う A 問題と、知識の活用力を試す B 問題に分けて出題していたが、新学習指導要領で示されている資質・能力の三つの柱、特に『知識・技能』『思考力・判断力・表現力等』が一体的に育成されるという理念を踏まえ、今年度から A 問題と B 問題を一体化して出題

※国語と算数・数学に加え、中学校 3 年で初めて英語の 4 技能「聞く・読む・話す・書く」の力を見る調査を実施

（2）児童生徒に対する調査

＊調査する学年の児童生徒を対象に、学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

4　結果の概要

（1）教科に関する調査結果の分析内容について

◇小学校

【国語】

昨年度の調査結果からの課題は、目的や意図に応じて、自分の考えの理由を明確にし、まとめて決められた字数で文章を「書く」こと、問題文を粘り強くじっくり読んで問題の意図を読みとる力であったが、今年度の状況も大きな変化は見られず、結果的に記述式の問題形式を中心に無解答率が高かった。

今年度の調査では、目的に応じて本や文章を選び、内容を的確に押さえて「読む」ことができるかどうかの設問や、話し手の意図を捉えながら聞き、話の展開に沿って

自分の理解を確認するために質問する「話す・聞く」の設問については、比較的正答率が高かった。一方、「漢字を読む・書く」については、例年箱根ミニマムの成果が見られ、全国平均を上回ることもあったが、文や文章の中で正しく漢字を書くこと、特に同音異義語の使い分けに課題が見られた。また、ことわざの意味を理解して、文の中で適切に使われているものを選択する設問についても課題が見られた。読書、音読の推進が課題解決の一つになるのではないかと思われる。

【算数】

昨年度の調査結果からの課題は、①除法の意味理解、②図形の構成の２点であったが、今年度の状況も大きな変化は見られなかった。

①の除法の問題は、ここ数年形を変えて出題されている。除数が小数でも整数でも同じ関係や法則が成り立つことの理解に課題があり、全国平均正答率を下回った。一方、減法に関して成り立つ性質の設問では、全国平均正答率を上回った学校もあり、概ね理解できていた。②の図形の問題では、図形の知識を問う設問は、正答率が 100％の学校もあり、全国平均正答率を上回った。一方、図形の構成要素や位置関係に着目しながら理解を深めていくことに課題が残った。資料から分かることを選択し、その理由を記述する問題では、１つの資料を読み取る設問については全国平均に近い数値を残していたが、２つの資料を関連付けて判断し、その理由を言葉や数を使って書き表す設問では、全国平均正答率を下回った。また、日常生活の事象を数理的に捉え判断する問題でも記述を苦手とする傾向が見られた。さらに、後半の無解答率が全国平均と比較して顕著になっており、最後まで粘り強く問題解決に取り組む姿勢が望まれる。

◇中学校

【国語】

昨年度の調査結果から「自分の材料を集め、まとめ、自分の考えを書く問題」に課題が見られたが、「文章を読み取って、そこに表現されているものの見方や考え方について、自分の考えを書く問題」について全国平均を上回ったことから改善が見られた。国語の平均正答率は全国平均よりやや下回ったが、無解答は全国平均より少なかった。

観点別にみると「読む能力」はほぼ全国平均並みであるが、「話す・聞く能力」と「書く能力」に課題が見られた。

具体的には、「話し合いの話題や方向を捉えて的確に話したり、相手の発言を注意して聞いたりして自分の考えをまとめること」、「資料を読み取り、伝えたい事柄について根拠を明確に書くこと」が課題である。

そこで、解決に向けて、明確な目的をもって話し合いをする活動を増やしたり、ただ話すだけではなく、論理的に聞き手に伝えたりする手法も指導していく必要がある。また、基礎・基本や思考力・表現力の向上を図るため、語彙を豊かにすることが望まれる。

【数学】

昨年度の調査結果から、「数学用語を正しく理解し活用する」、「道筋を立てて考え、説明したり証明したりする」、「問題を把握し、考察し、的確に処理する」の３点が課題であった。今年度の状況からは、問題形式が大きく変わった中、一部の領域で改善された部分が見られたが、全体的には大きな変化は見られず、昨年度の平均正答率をやや下回った。

資料（表やヒストグラム）の傾向を読み取り、判断の理由を説明する問題や、式の意味を理解し、事柄が成り立つ理由を説明する問題では、数学的な表現を用いて説明ができ、昨年度より正答率が向上した。また、図形の移動の特徴を捉える問題では、基礎知識を正確に理解でき、比較的正答率が高かった。

関数領域では、具体的な事象から、２つの数量関係を見いだし、表・式・グラフなどを用いて数学的に表現したり、事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を見いだしたりすることが課題である。

また、確率の意味を正しく理解し、不確定な事象について考察し、確率を求めることや、図形の性質や式の変形を用いて、道筋を立てて考え、総合的・発展的に考察することも課題である。

各領域での記述式の問題では、正答率の高い低いに関係なく無解答が多いことから、説明するための表現力、数学的な見方や考察する力の差が、個々に広がってきていると思われる。

【英語】

領域別では、「聞くこと」の問題は、全国平均正答率並みであったが、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」には課題が見られた。

「話すこと」では、与えられたテーマについて考えを整理し、まとまりのある内容を話すこと、基本的な文法や表現を理解して、応答することに課題が見られた。「読むこと」では、日常的な話題について、簡単な語句や文で書かれたものの内容を正確に読み取ることに課題が見られた。「書くこと」では、一般動詞の否定形や動詞の活用の理解に課題が見られ、与えられた情報に基づいて、文を正確に書く問題の正答率が低かった。

記述式・口述式の問題の無解答が多く、外国語表現の能力、単語力に課題があると思われる。また、口述式の問題では、正しい句では答えている生徒もいたが、文として話すことに課題が見られた。

（２）児童生徒に対する質問紙調査結果の分析内容について

児童生徒の自己肯定感や箱根（地域）教育に対する取組姿勢の高まりについて、全国と比べて成果が見られる。その背景には、「箱根の郷土を愛し、貢献できる人を培う」という方針のもと、児童生徒、教職員が学校ぐるみで、継続的に取り組んできた成果であると考える。

【小学生の質問回答より】

○　学校の授業時間以外における１日当たりの勉強時間について、１時間以上勉強する児童の割合が、昨年度の本町の状況と比べさらに増加し、全国を大幅に上回っている。各小学校の指導の成果が表れており、自分で計画を立てて勉強している児童も大幅に増加した。

○　５０％以上の児童が、学校の授業時間以外に、毎日３０分以上読書をしている。これは、昨年度の状況及び、国を上回る結果であった。選書会を実施し、児童が読みたいと思う本を充実させることや、各小学校間でブックシェアを行い、蔵書を共有する取組、さらには、隙間時間に読書や読み聞かせを行うなど、工夫した取組の効果が見られる。

○　「地域行事に参加している」と回答した児童は、昨年度と比較して減少したものの、８０％に迫る結果となった。「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがある」については、昨年度と比較し、大幅な改善が見られた。今後も総合的な学習の時間等で、探究的な学習の時間の充実に努めていくことが求められる。

○　「日本やあなたの住んでいる地域のことについて、外国の人にもっと知ってもらいたい」と回答した児童は、９５％を超える結果だった。園小中一貫教育における外国語活動や総合的な学習の時間の工夫した取組が効果となって表れてきている。

【中学生の質問回答より】

○　「自分には、よいところがある」については、７５％以上の生徒が好ましい回答をしており、全国平均を上回った。

○　学校の授業時間以外における１日当たりの勉強時間について、１時間以上勉強をする生徒の割合は、昨年度よりも減少しており、全国平均も下回った。学習習慣作りの取組について共有し、定着が図られるように努める必要がある。

○　毎日３０分以上読書をすると回答した生徒の割合は、全国並みの結果だった。さらに、７０％以上の生徒が、「読書が好き」と回答しており、全国平均を上回った。この結果については、朝読書の時間の実践など、継続した取組の成果であると考えられる。

○　今年度も７０％以上の生徒が「地域行事へ参加している」と回答している。生徒は、地域との関わりをもって生活している。

○　「地域や社会をよくするために何をすべきか考えたことがある」、「外国の人と友達になったり、外国のことについてもっと知ったりしてみたい」、「日本やあなたが住んでいる地域のことについて、外国の人にもっと知ってもらいたい」といった質問に対して、いずれも好ましい回答が全国平均を上回った。総合的な学習の時間に「地域理解学習」や「国際理解学習」を実践していることにより、生徒の意欲の高まりとなって表れてきている。